

屋敷林観察雑記

今井 宏

私の家は、JR高崎線深谷駅の南方に1.2km、荒川が約1～3万年前に形成した日本でも有数の荒川扇状地上にあります。墓碑銘等から天明年間(1781～1788)までたどることができる農家です。

約30年ほど前までは、県北地方では一般的なものでしたが、都市化の波により多くが伐採され、今では貴重な存在となった上州の空っ風と呼ばれる「赤城おろし」を防ぐ屋敷林が残っています。

以前から、この屋敷林があるためか、多くの種類の鳥や昆虫の姿が目につくので、1年を通して観察しています。非常に大雑把なものですが、夏の1日の観察記録を綴ってみました。



屋敷林全景（北東方向から）

家の北側は、高さ3.5mのシラカシの高垣根と混在する胸高直径60cm・樹高約25mのケヤキ、垣根の内側には祖先が子孫のために植えたスギ、胸高直径60cm・樹高15mのアラカシの大木、アオキ・サカキ・ナンテン・サンショウ等、下生えにリュウノヒゲ・シュンラン・ユキノシタ・ドクダミが生えている。シュンランは、除草剤で絶滅しかけたものを復活させたもの。ケヤキには、朝からミンミンゼミ・アブラゼミ・ツクツクボウシの大合唱。夕刻、まだヒグラシの声は聞いていない。アラカシには、夜になるとノコギリクワガタ・コクワガタ・コガネムシ・スジコガネ・クロゴキブリ・チャバネゴキブリが樹液を吸いに現れた。今年は、珍しくカブトムシも現れた。夜間の観察は、つらい。直ぐに、ヒトスジシマカ・ヤブカの仲間の大群に襲われる。

庭には、祖先が庭木として植えた胸高直径50cm・樹高10mのモチ・モッコク・キンモクセイの高木を中心に、ヒュウガミズキ・イロハモミジ・ヤマツツジ・キリシマツツジ・サザンカ・ノダフジの低木が密生している。

また、食用として植えたもので言い伝えによると樹齢200年を超えるカキ（禅寺丸）がある。カキ（禅寺丸）は、胸高直径50cm・樹高10m、近年やや樹勢に衰えが見えている。カキ（禅寺丸）は、別名王禅寺丸柿で、鎌倉時代に川崎市麻生区にある王禅寺の僧侶が発見した日本最古の甘柿の品種と言われているものである。秋になり、このおいしいカキを食べるのを家族全員楽しみに待っている。



カキ（禅寺丸）

密生した木々には、キジバト・オナガ・ヒヨドリ・ムクドリ・スズメ・シジュウカラ・メジロ・コゲラがやってきた。夕刻、鳥たちがねぐらに帰る頃、蔵や納屋から多数のアブラコウモリが飛び出し、幾何学的に飛翔しながら昆虫を捕らえている。

オミナエシの花には、モンシロチョウ、ヤマトシジミ・イチモンジセセリ等の小型のチョウ類、ハナアブの仲間、マルハナバチ等のハチが集まり蜜を吸っている。春の異常気象のためか、3度目の花が咲いているキンカンには、ナミアゲハチョウ・クロアゲハチョウ等が産卵していた。

屋敷林は、このように多くの鳥や昆虫を育てています。枝おろしや落ち葉掃き等、維持管理は大変ですが、できる限り守っていきたくと思っています。

(いまい ひろし・副館長)